

ザ・シューター 極大射程

2007(平成19)年6月3日鑑賞(三番街シネマ)

★★★★



監督＝アントワーン・フークア／原作＝スティーヴン・ハンター『極大射程』（新潮文庫刊）
／出演＝マーク・ウォールバーグ／ダニー・グローバー／マイケル・ベニーヤ／ケイト・マ
ーラ／イライアス・コティーズ／ローナ・ミトラ／レイド・シャーベジア／ネッド・ビーテ
ィ（UIP 配給／2007年アメリカ映画／125分）

……スナイパーものの新たな名作の誕生だが、「合衆国 vs. 孤高の狙撃手（シューター）」という構図には少し疑問も……？ なぜ、主人公は2度も国家に騙され、裏切られることになったのか？ それが第1のポイント……。そして、その復讐のため、彼は誰をターゲットとし、どんな行動を……？ それがこの映画全体のテーマ。しかしこの映画に限っては、政治的なテーマにあまり深入りせず、「これぞプロ！」という「ザ・シューター」の生きざまを楽しめばいいのでは……？



何とこちらはガラガラ……

6月3日（日）の夕方4時20分からの梅田ピカデリーでの『大日本人』（07年）は満席だったが、7時20分から三番街シネマで上映された『ザ・シューター 極大射程』は大きな劇場であるにもかかわらずガラガラで、観客は総数で20名程度。

私は潜水艦モノや密室モノ、そしてスナイパーものが大好き。なぜなら、その手の映画では観客は必然的にスクリーンに集中せざるをえなくなるから、程よい緊張感が生まれる確率が高いため……。したがって、この映画についても、『大日本人』と同じようにあらかじめ6月1日（金）に最後列の真ん中の座席をキープし、『大日本人』と違い、その鑑賞を楽しみにしていたもの。そして、前後左右を含め周りには誰もいないため、大名気分でゆったりと名作を鑑賞……。しかし、『大日本人』と『ザ・シューター 極大射程』でこれだけ観客動員数に落差があるのをみると、宣伝力もさることながら、日本人の自力による情報収集能力の欠如を嘆かざるをえないこ

とに……。

原作の設定 vs. 映画の設定

パンフレットにある、映画評論家細越麟太郎氏の「愛犬のための弔いは盛大にやる。」から、以下少し原作の紹介を……。この映画の原作は、スティーヴン・ハンターが1993年に書いた長編小説『Point of Impact』で、2000年に翻訳が発売されて大ベストセラーになったもの。私はもちろんそれを読んでいないが、上下2巻のその大作では、主人公ボブ・リー・スワガーは、ベトナム戦争で活躍したアメリカ海兵隊の一等軍曹。そして、あれから、30年。今、彼は、アーカンソー州西部の山の中でトレイラー・ハウスに愛犬と暮らし、好きなウィンチェスター・ライフルの整備をしては鹿狩りをしているという設定。そして、年齢は51歳とのこと。

そんな設定どおりで映画化するなら、主役はスティーブン・セガールで決まり(?)だが、アントワーン・フークア監督はその道を選ばず、『ディパーテッド』(06年)でアカデミー賞助演男優賞にノミネートされたマーク・ウォールバーグを起用したため、原作とは設定を大きく変えることに。すなわち、スワガーが赴いた戦場は1960年代のベトナム戦争ではなく、アフリカにある某国という設定。どの国と特定されていないものの、それはアメリカの言葉でいわゆる「ならずもの国家」と称されている国。すなわち、そのならずもの国家を鎮圧するためスワガーはアメリカ兵士として必要不可欠な国家的軍事的介入をしたというわけだ。そして、今、ボブ・リー・スワガーは、ワイオミングの山奥で愛犬サムと共にひっそりと暮らしているわけだが、それはアフリカ某国での「あの出来事」から3年後……。

「あの出来事」とは……？

映画の冒頭、舞台はアフリカの某国。スワガーは、相棒のドニーと共に狙撃の任務に就いていた。無線の指示にもとづき、スワガーとドニーは狙撃を開始。次々と敵は倒れていき、あとは予定どおり撤退……。といくはずだったが、なぜか突然無線の連絡が途絶えてしまった。そんな中、敵地上部隊からの反撃が激しさを増し、ヘリコプターからの攻撃も。これは全くの想定外だった……。とっさにスワガーは「俺たちは見捨てられた！」と悟ったが、その直後ドニーはヘリコプターからの銃弾に倒れることに……。命令には絶対服従。それがアメリカ海兵隊を含む世界の軍隊共通の原則だ

が、服従すべき国家からの裏切りをどう考え、どう整理すればいいのだろうか……？ スワガーはその答えを見い出せないまま、ワイオミングの山中で隠遁生活を送ることになったのだが……。

二兎を追うものは……？

スナイパーによる大統領暗殺ものの名作といえば、何といてもフランスのドゴール大統領暗殺を描いた『ジャッカルの日』(73年)。他方、アメリカのケネディ大統領暗殺をテーマとした映画は、『ダラスの熱い日』(73年)、『JFK』(91年)などたくさんある。また、大統領暗殺などという政治的なテーマとは全く無関係に狙撃手同士の戦いを描いた戦争映画の名作が『スターリングラード』(01年)、『シネマルーム1』(8頁参照)だし、スナイパーの生きざまに焦点を当てた名作が『山猫は眠らない』のシリーズ(『シネマルーム3』128頁、『シネマルーム8』381頁参照)。

こんな風にスナイパーを主人公にした映画をいろいろ並べてみると、さまざまなテーマやパターンがあることがよくわかる。そんな目でこの映画を見ると、一方では、大統領暗殺とアメリカの軍部や政治権力と結びつきアメリカの暗部でうごめく巨大複合企業の悪を描き、他方では職人気質のプロ中のプロであるスナイパーの個性を際立たせたもの……。私も弁護士稼業と映画評論家稼業の二足のわらじをはいているが、立派に「二足のわらじ」をはけるのか、それとも「二兎を追うものは一兎も得ず」となるのかは微妙なところ……。そんな観点から見ると、さてこの映画は……？

なぜ再び……？ それが最初のポイント……

この映画の最初のポイントは、国家に裏切られたスワガーが、なぜ再びアイザック・ジョンソン大佐(ダニー・グローバー)の依頼を受けたのかということ。ジョンソン大佐がスワガーの家を訪れたのは、大統領暗殺の企てがあり、「犯人が狙撃を行う可能性のある場所を特定してほしい」という依頼のため。当初すべての接触を拒んだスワガーだったが、腹を割って話すジョンソン大佐の言葉に気持が揺れ動いたことはたしかなよう。

しかして、それは一体なぜ……？ スワガーの兵士としての大統領護衛任務への義務感？ それとも狙撃手としてのプライド？ この映画ではスワガーの報酬のことは全く触れられていないが、少なくとも多額の報酬でなかったことはたしかだが……？

狙撃場所の特定は神ワザ……

国民に向かって直接演説する大統領を狙撃する場所を半径800m以内で特定せよ、と言われても、普通それはムリなはず……。しかもこの映画の設定では、大統領が演説するのは3カ所だけだが、基本的にそれは無数にあるはず。したがって、いくら狙撃の名手スワガーが犯人の立場に立って場所を特定しようとしても、それを1カ所に特定するのは至難のワザ……。そう思うのだが、そうやってしまったのではストーリーが成り立たないことに……。スワガーが特定した狙撃場所は、フィラデルフィアの独立記念館前の広場。演説当日、スワガーが監視スコープで犯人の監視にあたり、スワガーの指示と同時に部隊が突入して犯人を取り押さえる。そんな警備態勢が組みれ、大統領暗殺阻止計画は万全のはずだったが……。

撃たれたのは……？

この映画の第2のポイントは、これだけ用意周到なシナリオが練られていたにもかかわらず、そのとおりにコトが進まなかったこと。すなわち、スワガーの突入命令にもかかわらず、なぜかスワガーの監視スコープの中に映るライフルは動かなかった。「これはおかしい」、スワガーがそう思った直後、同時に発射されたのは2発の弾丸。その1発は大統領に向けられたもの、そしてもう1発は至近距離でスワガーの背後から……。こりゃ一体ナニ……？

またもや、自分が国家に騙されたと悟ったスワガーだが、とにかく今は逃げるのみ……。パトロール中のFBIチームの1人であるニック・メンフィス（マイケル・ペーニャ）の銃と車を奪って逃げ始めたが、何と今やスワガーが大統領の狙撃犯とされ、大々的な捜査網が敷かれることに……。こんな厳戒体制の中、大ケガを負ったスワガーは、一体どのようにして、どこへ逃げていくのだろうか……？

スワガーの逃走先は……？

重傷を負ったスワガーは、早急に傷の手当てをしなければ出血多量で死んでしまうことは明らか。したがって、厳戒体制の包囲網を突破しながら、傷の応急手当をする姿が、この映画の1つの見どころ。しかしまあ、捕まってしまったのでは映画が成り立たないのはわかるが、いくらプロでもこんな手負いの犯人(?)の逃走を許すよう

では、アメリカの警察も FBI も能力を疑われても仕方ないのでは……？

さてそこで、スワガーの逃走先は……？ ワイオミングの山中に戻ることはできないのは明らかだし、あの事件以来3年間も世捨て人生活を送ってきたスワガーにとって、行き先はどこにもないはず……？ そう思っていたが、スワガーはある1つの目的地に向かって逃走していることは明らか。スワガーがたどり着いた家には、ちょっと色っぽい姿をしたドニーの妻サラ（ケイト・マーラ）の姿が……。なるほど、これならわかる。しかし、スワガーの潜伏先を懸命に探るジョンソン大佐や警察そして FBI は、それくらいすぐに思いつかないの……？

敵はジョンソン大佐、それとも合衆国……？

この映画のチラシの謳い文句は「合衆国 vs. 孤高の狙撃手（シューター）」。またイントロダクションのタイトルも「名誉にかけて、正義のために。」。したがって、この映画の後半は、1度ならず2度までも国家に裏切られるという屈辱を味わうことになったスワガーが、ドニーがサラに残したライフルを手に、暗殺犯の汚名を晴らしかつ国家への復讐をするために立ち上がっていく姿を描くことに……。

たしかに、その意味はよく理解できる。しかし、私にはどうも「合衆国 vs. 孤高の狙撃手」という構図はピンとこない。なぜなら、合衆国そのものに対する復讐のためには、革命でも起こしてスワガーが政権の中枢に座らない限りはムリというものだから……？ 今スワガーが復讐のターゲットとしているジョンソン大佐やその黒幕であるチャールズ・ミーチャム上院議員（ネッド・ビーティ）を狙撃したとしても、彼らの代わりはいくらでも生まれてくるはず。つまり、映画の中で、ジョンソン大佐やミーチャム上院議員も語っているように、スワガーをワナに陥れた実行犯はたしかに彼らだが、そのバックは政官財一体となった国家システムそのものなのだから、ジョンソン大佐やミーチャム上院議員を殺しても、それは合衆国に対する復讐にはならないということだ。この映画はスナイパーものとしてはよくできているのだが、「合衆国 vs. 孤高の狙撃手」という構図を浮かび上がらせようとしたため、前述のように「二兎追うものは一兎も得ず」という弊害も……？ 実際にスワガーの行動を見ている、必ずしも国家レベル・政治レベルの問題意識は強いものではなく、単なる狙撃のプロとしての本能だけで動いているように思える面も……。そして私が思うに、それはそれでよかったのでは……？

パンフレットはシューター色でいっぱい……

この映画は前述のとおり二兎を追っているが、そのタイトルからわかるように、やはり「ザ・シューター」としてのスワガーの生きザマにウエイトをおいたもの……？ したがって、「合衆国 vs. 孤高の狙撃手」という政治的色彩（？）は、映画のラストシーンが近づくにつれて多少あいまいになる面も……？ そのことはパンフレットを読んでも、シューター色がいっぱいであることによく表れている。すなわち、青井邦夫氏（ムービー・ウェポン・アナリスト）の『『ザ・シューター 極大射程』の狙撃シーン』を代表として、パンフレットの中の解説やインタビューは、狙撃に関する記事一色といっても過言ではないほど。もちろん、私は銃に関する知識も狙撃に関する知識も持ち合わせていないが、狙撃に関する技術論や精神論は結構面白いもの。したがって、この映画に関しては、あまり「合衆国 vs. 孤高の狙撃手」にこだわらず、単純にスーパーヒーローによる復讐モノとして楽しめばいいのでは……？

映像の美しさや撮影技術もしっかりと……

ワンチャンス狙いの狙撃手がいかに厳しい条件の下で待機しているかは、『スターリングラード』でも、この映画でも明らか。大統領暗殺のため大都会のフィラデルフィアのまちの中で待機する場合は楽だろうが、山の中にこもり、雪の中でじっと待機するのは大変なこと。観客は美しい山の自然や一面真っ白の雪の美しさを堪能すればいいのだが、その中でじっと待機している「ザ・シューター」とそれをじっと撮影しているスタッフたちの苦労は並大抵ではないはず……。

そんなことを十分感じさせてくれる大自然の山々の美しさをしっかりと捉え強調した映像の美しさが、この映画の1つの特徴。とりわけ、ラストの、クライマックスとなる雪の中での狙撃シーンは圧巻！ ザ・シューターの厳しさや雪の中の撮影の大変さを理解しながら、美しい映像をしっかりと楽しまなければ……。

2007(平成19)年6月6日記